〔ぎょしょく教育発祥の地・愛南町〕

愛南ぎょしょく教育プラン

≪愛南ぎょしょくタウン構想≫

愛南町ぎょしょく普及推進協議会

愛南町　＆　愛媛大学

２０１１年３月

スローガン

「ぎょしょく教育」で、明日の愛南を拓く！

「ぎょしょく教育」で、地域も、水産業も、元気いっぱい！！

これからの愛南は、「ぎょしょく教育」から！！！

目　　次

１．はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３

２．これまでの実践経過　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４

３．評価と効果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　７

４．策定の根拠と方向性　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１５

５．理念と目標　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１９

６．今後の具体的な方策　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２２

１．はじめに

漁獲量や漁獲金額の減少、燃油や餌料の価格高騰、魚価の低迷、漁業者の高齢化と後継者不足、漁家経営の不安定化、漁場環境の変化など、現代日本の水産業の厳しさは増している。そうしたなか、愛媛県の漁業生産額（漁業・養殖業を含む）は、全国シェア６％を占め、全国第３位となっている。魚種別には、天然マダイ、養殖マダイ、養殖真珠、養殖真珠母貝の全国シェアは第１位で、養殖ブリや養殖ヒラメも第２位である上、愛南町深浦漁港でのカツオ水揚げが四国一である。本町の水産業は、南予地域、さらに、愛媛県で確固たる地位を保持し、漁船漁業と魚介類養殖が共存しており、日本漁業の縮図と言えよう。

他方、日本人の食生活は、欧米化や生産と消費（漁と食）の乖離が明白で、食育推進も重視されている。水産物消費をみると、国民１人１日あたりの魚介類と肉類の摂取量が平成18年に逆転し、全ての世代で魚の摂取量が減少して「魚離れ」が深刻化している。特に、若年層の「魚離れ」が顕著であり、小・中学生の学校給食で嫌いな料理の第１位は魚全般だという報告もある。また、本町の小学生の魚に関する認知度や理解度は決して十分だと判断できる状況になかった。

本町では、官民一体となった水産振興の取り組みが多面的に展開されており、そして、この現状を少しでも打開するための取り組みが「ぎょしょく教育」である。愛媛大学から「ぎょしょく教育」実践の提案をしたのは2005年10月であった。愛南町役場水産課、教育委員会学校教育課と愛南漁協、久良漁協は愛媛大学と協働で試行的なプログラムが展開された。それを契機に、「ぎょしょく教育」は地域ぐるみで様々なレベルの事業が本格化した。プログラム試行から５年を経過した現在、「ぎょしょく教育」は地域内での完結性を保持できるほどに浸透しており、また、社会的な評価も高まって、本町が地域に根ざした総合的な水産版食育の先進地域として確固たる地位にある。

本プランのねらいは、「ぎょしょく教育発祥の地」である本町が、今後、「ぎょしょく教育」を系統的に効率良く展開し、効果的な成果を中長期的に得るための方途を示すことにある。継続性を念頭に、体系的で、かつ、総合的なビジョンが不可欠であることから、本プランを策定することにした。その際に留意すべきことは、①本町の地域振興に関わる計画を踏まえること②過去５年間にわたる「ぎょしょく教育」の実績と評価を念頭に置くこと③「ぎょしょく教育」実践の効果測定を踏まえることの３点である。これらを基本において、地域活性化に向けた「ぎょしょく教育」の具体的な方策を提言する。

最後に、本プラン策定にあたって、本町の関係各位から絶大な協力を得た。本プランも産・官・学・民の協働による成果である。なお、平成22年度の新ふるさとづくり総合支援事業（愛媛県地域活性化新設補助事業）の支援もあった。これも含めて関係各位に改めて深謝を申し上げたい。

2011年３月

愛南町ぎょしょく普及推進協議会
「愛南ぎょしょく教育プラン」策定プロジェクトチーム
代表　若林良和（愛媛大学南予水産研究センター副センター長・教授）

２．これまでの実践経過

【2005年】

10月　「ぎょしょく教育」プログラムの試行（長月小学校）
（全国の先駆けであり、「ぎょしょく教育発祥の地・愛南町」の根拠となる）

12月　「ぎょしょく教育」プログラムの試行（東海小学校）
（立地条件（内陸部と臨海部）などＴＰＯに応じた実践の柔軟性を再認識する）

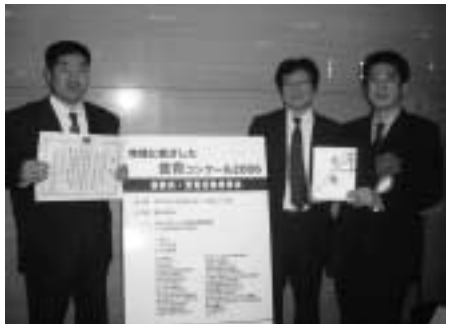
【2006年】

４月　愛南町魚食普及推進協議会を愛南町ぎょしょく普及推進協議会と改称
（魚食ではなく、「ぎょしょく」を重視し、メンバー拡充で実践を深化させる）

６月　『水産白書　平成18年版』で「ぎょしょく教育」の取り組みを紹介
（魚離れ是正、魚食普及に向けた本格的な優良事例として掲載される）

【2007年】

１月　地域に根ざした食育コンクール2006優秀賞の受賞
（地域の産学官民連携、斬新なコンセプトが評価され、愛南町ぎょしょく普及推進協議会として受賞する）



２月　『ぎょしょく教育実践マニュアル』の刊行
（愛媛大学で、「ぎょしょく教育」の周知・普及に向けたマニュアルとして開発される）

２月　カードゲーム「ぎょショック」の完成・配付
（愛媛大学で、子供たちへの「ぎょしょく」を普及するためのツールとして開発される）

５月　「ぎょショック・バスツアー」の開始
（ＪＲ四国・愛媛新聞旅行との連携で、地場産のカツオ、寒ブリ、カキを提供する）

６月　『水産白書　平成19年版』でカードゲーム「ぎょショック」を紹介
（カードゲームをはじめ、地域密着型の食育・魚食普及が評価されて掲載される）

７月　ＮＨＫ『おはよう日本』海の日特集「魚好きの子供を増やせ」で全国放映
（「ぎょしょく教育」の実践と効果が30分間にわたり紹介される）

７月　町内保育所の給食に「カツオカレー」登場
（肉の代わりに、サイコロ状にしたカツオを具材とするカレーを提供する）

【2008年】

３月　桜鯛ぎょショック・バスツアーの開催
（コープえひめを対象に、養殖場見学と桜鯛料理試食で、最初の産消交流を試みる）

５月　『ぎょしょく教育　－愛媛県愛南町発　水産版食育の実践と提言－』（筑波書房）の刊行（愛媛大学で、地域協働による「ぎょしょく教育」の実践内容と展望を取りまとめる）

６月　コープえひめとの連携による、今治市内でのぎょショック調理講座の実施
（今治市の今治地区、波止浜地区の２か所で実施する）

７月　町特産品と「ぎょしょく」の宣伝カー（公用ワゴン車）の登場
（写真シール「ぎょしょくのまち　愛南町」を貼付してＰＲする）

10月　「ぎょしょく教育」教材ＤＶＤの作成用の３ヵ年の取材開始
（「ぎょしょく教育」促進のために、季節ごとに計15箇所で地域水産業の現地取材を始める）

11月　愛媛大学「ぎょしょく教育」研究推進プロジェクトチームが大日本水産会の魚食普及功績者として表彰
（大学と地域の連携・協働による魚食普及に対して表彰される）

12月　シーフードジュニアマイスター（お魚のソムリエ）の資格取得
（町役場と漁協の職員２名が日本食育者協会から認定される）

【2009年】

３月　さかなクンによる食育普及講演会
（食育・「ぎょしょく教育」普及活動として、さかなクンの講演を実施する）

12月　シーフードマイスター協議会えひめの設立
（新たに14人がシーフードジュニアマイスター資格を取得し、組織化を図る）

【2010年】

１月　全国学校給食週間の学校給食で「鯛の鯛（鯛の形をした骨）」探しブームの到来
（鯛のかま塩焼きが提供された「愛南鯛づくしメニュー」で登場する）

３月　『愛なん食育プラン』の策定
（食育推進計画で、「ぎょしょく教育」が中心的な取り組みとして位置付けられる）

３月　ローカルヒーロー・ぎょしょく普及戦隊「愛南ぎょレンジャー」のキャラクター完成
（町特産の魚介類５種を町内の小学生が考案し、南宇和高校生がイラスト化する）

３月　「愛南ぎょレンジャー」のイラスト入りエプロン、ポロシャツ、缶バッジの製作
（ぎょしょく普及のためのグッズとして開発しポロシャツが市販される）

５月　「義務ぎょしょく」の開始
（町内の保育所、小中学校の全校園で「ぎょしょく教育」を実施する）

８月　東京都ぎょしょく普及交流事業（都庁水産課）などとの連携に着手
（東京都中野区と小平市での出前授業、神奈川県鎌倉市の小学校と都市漁村交流を開始する）

11月　日本初の中学生、高校生、大学生のシーフードジュニアマイスター（お魚のソムリエ）４名が誕生

【2011年】

２月　「ぎょしょく教育」教材ＤＶＤ「ぎょしょーく愛南町」の制作
（「ぎょしょく教育」促進に向けて、地域水産業や実践内容を取りまとめる）

３月　『愛南町のぎょしょく教育の取組み』の放映（南海放送）
次世代水産業普及ネットワークシステムで、ホームページの完成（ピアザ・愛南ぎょしょく）
日本初のｅ－ラーニングを使用した小学５年生向け「ぎょしょくジュニアマイスター」の設置（ＧＯ！ＧＯ！ぎょレンジャー）
『愛南ぎょしょく教育プラン』の策定
（愛南町における「ぎょしょく教育」のあり方とその方策を提言する）

「ぎょしょく教育」の７つの「ぎょしょく」とは？

【魚触】　魚に触る体験学習：調理実習
【魚色】　魚の特色（種類や栄養）を知る学習
【魚職】　魚の職業（とる漁業）を知る学習
【魚殖】　魚の職業（育てる漁業）を知る学習
【魚飾】　魚の文化を知る学習
【魚植】　魚をめぐる環境を知る学習
【魚食】　魚の味を知る学習：調理と試食

３．評価と効果

平成22年度より、本町では「義務ぎょしょく」として、町内の保育所、小中学校の全校において「ぎょしょく教育」を実施している。本プランでは、授業前後に実施したアンケート結果をもとに検討する。その実施概要は以下のとおりである。

調査時期：平成22年４月～８月

調査対象：町内の小学校で「ぎょしょく教育」授業を受けた児童３７１名

調査方法：質問紙による悉皆調査

なお、本プランで使用したアンケートは小学生の前期分（４月～８月）に限定される。全体（全数）を対象にした分析結果は後日、公表する予定である。

１．授業全般に対する評価

「ぎょしょく教育」授業の評価としては、「大変良かった」、「まあ良かった」と肯定的に捉えた児童は全体の約97％に達し、極めて高い。（図１）そして、その授業に対する効果として、魚好きの児童がもっと好きになったケースが半数を超え、普通であった児童が好きになったケース30％、魚嫌いの児童が好きになったケース10％と、この授業によって魚好きが大いに促進されたことが明確に裏付けられた。（図２）魚好きの児童を増大させるという「ぎょしょく教育」の本来的な目標が達成されている。

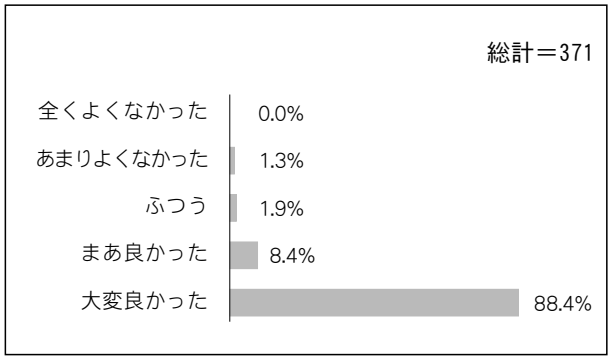


図１　ぎょしょく授業の評価

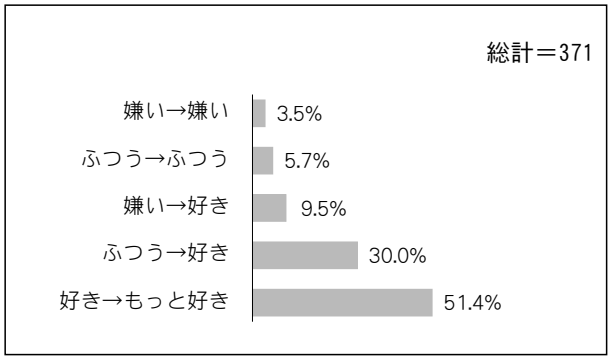


図２　ぎょしょく授業と魚好き
（授業を受けて魚が好きになったか）

ぎょしょく授業を「大変良かった」、「まあ良かった」と積極的に評価した児童は、70％以上がより魚好きになっている。（図３）したがって、「ぎょしょく教育」は、児童の授業評価が高いことに連動して、魚好きにさせるなど絶大な教育効果が得られた。「ぎょしょく教育」をより一層、質的向上を図ることにより、さらに、「魚離れ」を克服する有効な教育システムになる。

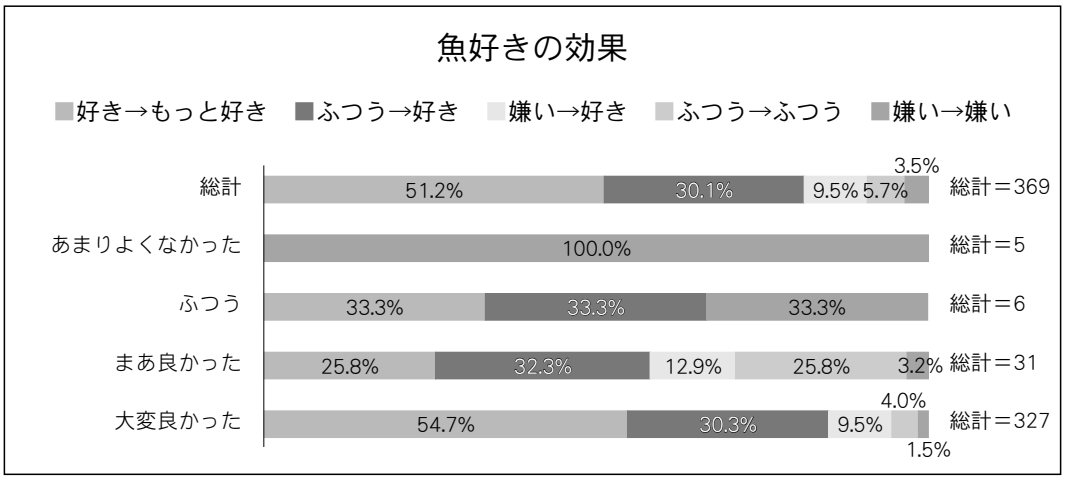


図３　ぎょしょく授業の評価と魚好き効果

２．魚に関わる生活環境

魚が多く提供される家庭では、魚好きの児童が50％を超え、また、魚をさばいた経験も50％以上になっている。（図４、図５）児童の魚に対する嗜好の決定には、魚食の頻度、魚さばき経験の有無などと明確な相関が見られる。したがって、「ぎょしょく教育」の学習プロセス全体を念頭に置きながら、さらに「魚食」や「魚触」といった魚に関する直接的な体験の機会を提供して、魚へのより体系的な理解を深めていく必要がある。

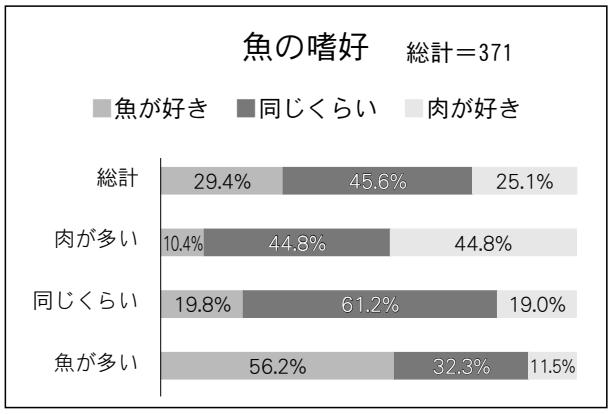


図４　魚食の頻度と魚への嗜好

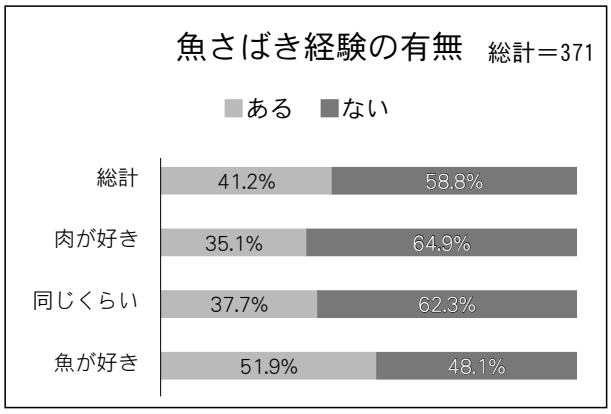


図５　魚食の頻度と魚さばき経験の有無

３．授業内容に関する評価

「ぎょしょく教育」授業の実施内容は、平成22年より精緻化され、おおよそ次の４つのタイプに大別できる。

【タイプ１：調理実習】：魚食研究会や食生活改善推進員、漁協女性部など地域諸団体を講師とするものである。これは公民館などと連携して各校区で生産される、旬の魚を用いた調理指導である。

【タイプ２：社会座学】：小学校５年生の社会科「そだてる漁業」単元への授業協力である。小学校で養殖業者を講師に養殖業の理解を深めるために、出荷用かごや餌などを提示して、養殖マダイと天然マダイに触れて違いを学び、養殖魚の安全性も解説する。

【タイプ３：現場見学】：水産業に関わる現場を巡検するもので、小学校の事情に応じて、

３つのパターンがある。①深浦市場で、活魚やカツオの水揚げ、セリ、製氷施設を見学し、漁協職員との質疑応答をする。②市場とマダイ養殖場（湾内の出荷場と幼魚生け簀）を見学する。③渡船を用いて沖合のタイやブリ、マグロの養殖場を見学する。

【タイプ４：ぎょしょくパッケージ】：大漁旗で飾った会場へ児童を迎えて３つの体験学習ブースを児童が巡回する方式である。３つのブースは①魚触ブース（朝に水揚げされた魚の種類や特徴を説明しながら児童に触らせる）、②魚色ブース（「町の魚」カツオの生態や特徴、調理法・食べ方を、本物のカツオや食育玩具「カツオ解体クン」を用いて説明する）、③魚職ブース（グラスファイバー製の竿と木型のカツオを用いてカツオの一本釣りを模擬体験する）で構成される。そのあと、水揚げがあればカツオ解体ショーを行ったり、養殖資機材（出荷用かご、注射器、餌など）を紹介したりする。なお、このなかで小学校低学年を対象に、休み時間を用いて魚触のみの実施もある。

「ぎょしょく教育」は魚に関する系統的な総合学習を大原則にしているが、担当講師や実施校などの事情を考慮し、各校に上記の４タイプ・３パターンから選定を依頼した。

４つのタイプともに高い評価を80％以上得ているが、特に、タイプ４（ぎょしょくパッケージ）に対する評価が極めて高い。他方、系統学習を前提とすることから、タイプ４のうち「魚触」のみに特化させた実践は「大変良かった」が50％以下にとどまり、他に比べて低い評価であった。（図６）したがって、今後も、魚に関する生産から加工、流通、消費・文化までを体系的、かつ、総合的に学習する考え方を遵守し、７つの「ぎょしょく」コンテンツの質的向上を図る重要性は明白である。

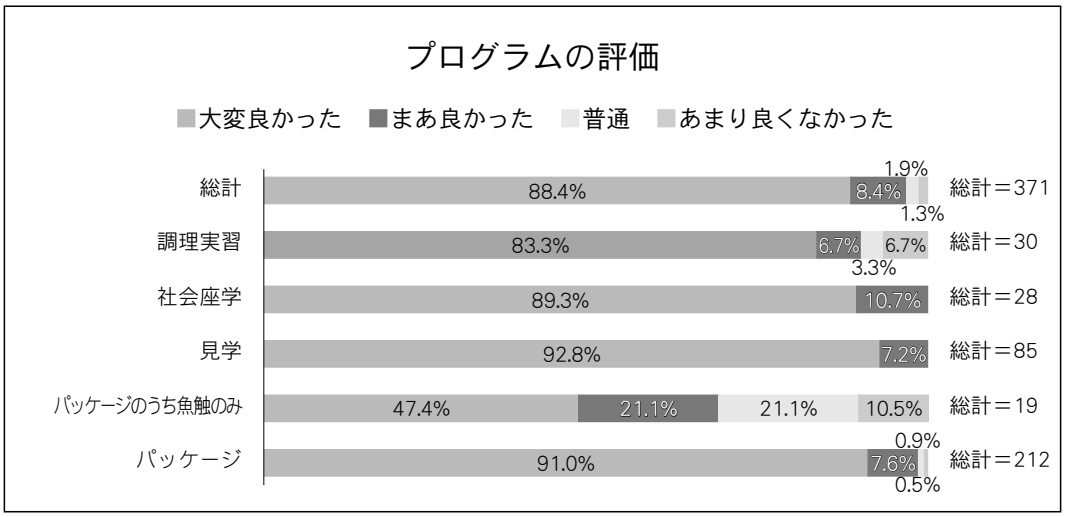


図６　ぎょしょく授業のタイプ別の評価

４．子供の魚をめぐる家族環境

子供たちの包丁で魚をさばいた経験の有無をみると、「経験なし」が60％近くに達する。したがって、包丁を活用した「ぎょしょく教育」は必要である。（図７）

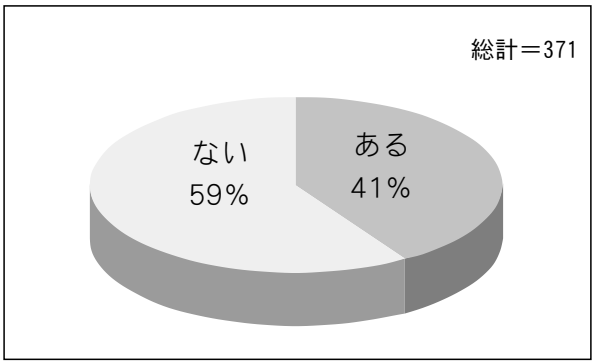


図７　包丁で魚をさばいた経験の有無

魚や肉を問わず、児童のよく食べるものを決定する理由は、「（家族・親から）出されるから」という受動的なものが全体の３割以上に及んだ。（図８）児童がより頻繁に魚を食べるには、食卓に魚料理を提供する頻度を高める必要がある。そのために、両親に対する「ぎょしょく」の啓発と実践が重要となる。

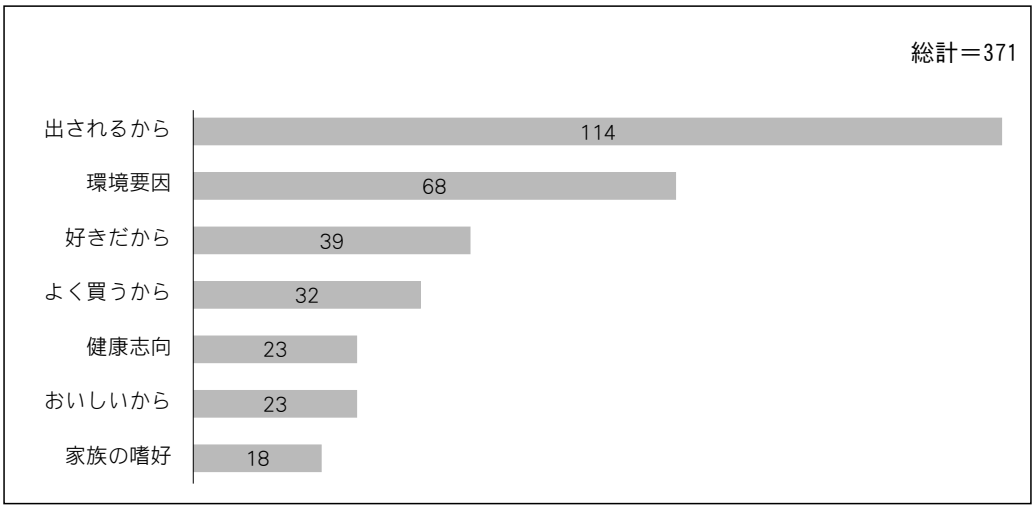


図８　児童をめぐる食環境
（児童が、魚や肉をたくさん食べる理由）

魚料理の提供促進させるための要因の一つとして、魚をさばけるかどうかがポイントになる。保育所の保護者を対象にした、魚さばきの能力（４つのレベル）に関するアンケート結果は、次のとおりである。

Ａ：カツオやブリなど大きな魚までさばける
Ｂ：アジやイワシなど小さな魚ならさばける
Ｃ：全く魚をさばくことができない
Ｄ：この１年間、魚をさばいていない

４つのレベルを年齢別にみると、魚をさばける割合は各世代とも半数を超え、40歳代と30歳代では70％～80％に達する。（図９） レベルＡは20歳代で皆無であるのに、40歳代は40％を超えている。世代が下がるにつれてさばく能力も低下することから、魚のさばき方や食べ方などを伝承する必要性がある。20歳代を中心とする保護者・一般成人への「ぎょきょく教育」の実施、とりわけ、包丁の使用を中心とした総合的な調理実習は不可欠であり、学校のＰＴＡ活動、公民館などの社会教育の場など様々な機会において、幅広い「ぎょしょく教育」を展開すべきである。

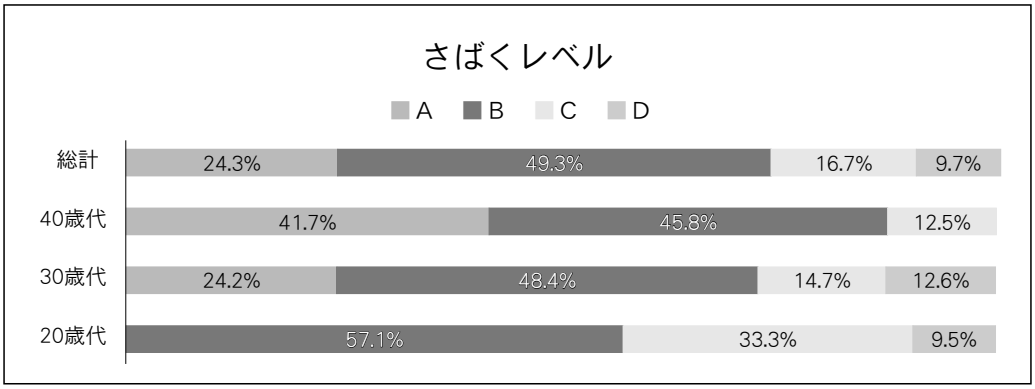


図９　年齢別にみた魚さばき能力

保護者が求める「魚好きを増やすために必要な取り組み」では、「（魚料理の）レシピを増やす」という回答が最も多く、魚料理のバリエーションの少なさ、ワンパターン化を克服する取り組みが求められる。（図10）魚に親近感を持ってもらい、手軽に多様な魚料理の提案が求められる。

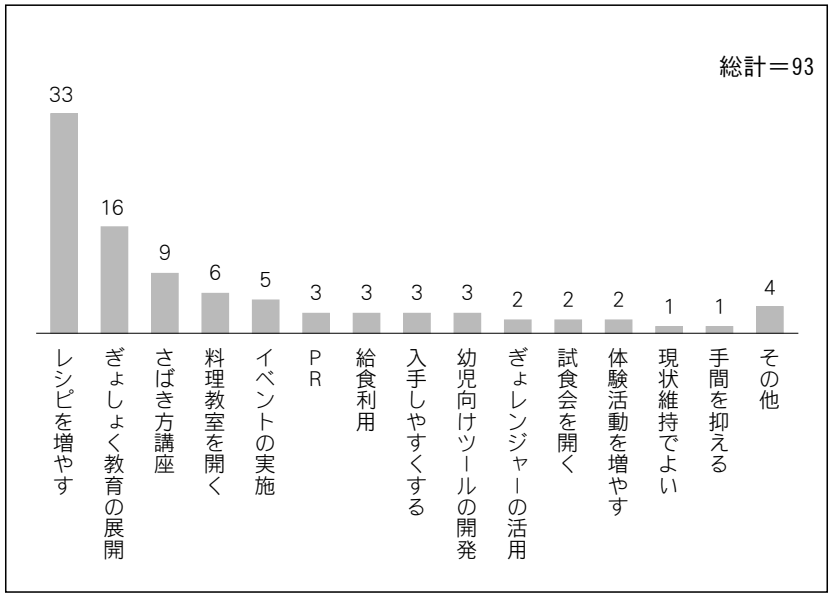
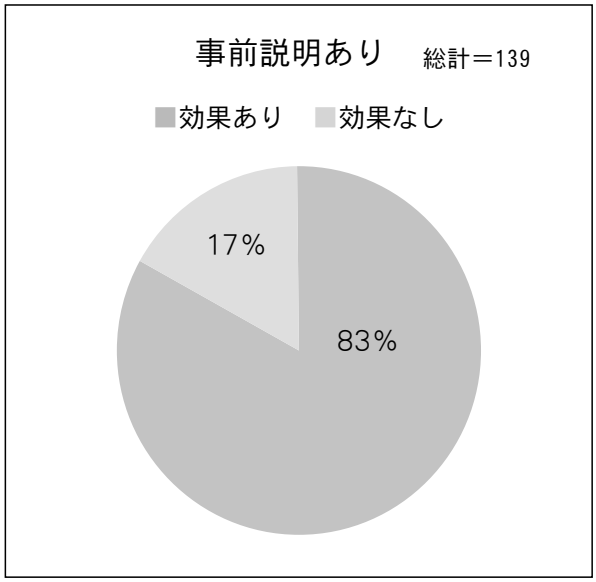


図10　魚好きを増やすために必要な取り組み

５．授業効果を高める手法

児童の前で魚をさばく場合に、講師による事前説明（解体において、生き物であるため、当然、血や内臓が出るというアナウンス）の有無は、授業評価に一定の影響がある。「効果あり」を授業前後で魚好きへ好転したケース、それ以外を「効果なし」とした場合、事前説明の有無で効果に約11％の差が生まれている。（図11）出血、内臓の露出をグロテスクなものと捉えて拒絶感を持つ児童も見られ、会場の雰囲気が後退してしまうこともある。事前説明は不可欠であり、このことが教育効果を大きく左右し、生き物に対する畏敬と感謝の気持ちを醸成させることが重要となる。



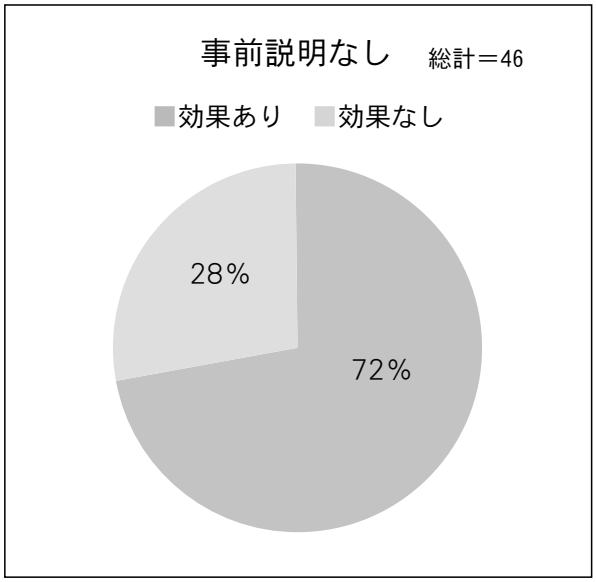


図11　魚解体時における事前説明の有無と教育効果

授業評価で「大変良かった」理由を、低学年（１～３年生）と高学年（４～６年生）に区分してみると、明らかな相違がみられた。（表１）低学年では「魚触」や「一本釣り体験」などの体験活動を良かったとする割合が40％を上回るのに対し、高学年の体験活動は20％程度にとどまる。一方、「知識、理解」が高学年で50％を超えるが、低学年では30％以下である。したがって、児童の成長段階や学年齢に応じた臨機応変な取り組み内容が重要である。低学年では自らの五感を使った体験学習が、高学年では魚、水産に関する知識や理解がポイントになる。今後、「ぎょしょく教育」を展開していく場合、受講生の多様な状況やニーズを的確に把握したコンテンツやツールの開発が求められる。

低　学　年	人数	比率
知識、理解	22	28.2%
魚触	21	26.9%
面白かった	8	10.3%
一本釣り体験	6	7.7%
見学内容	6	7.7%
さばいた	4	5.1%
体験全般	1	1.3%
解体ショー	1	1.3%
試食	1	1.3%
実物を見られた	1	1.3%
その他	2	2.6%
回答なし	5	6.4%
合　　計	78	100%

高　学　年	人数	比率
知識、理解	130	52.0%
見学内容	30	12.0%
魚触	27	10.8%
面白かった	19	7.6%
体験全般	9	3.6%
試食	9	3.6%
一本釣り体験	8	3.2%
さばいた	7	2.8%
調理	1	0.4%
実物を見られた	1	0.4%
解体ショー	1	0.4%
その他	2	0.8%
回答なし	6	2.4%
合　　計	250	100%

表１　学年別にみた授業評価の理由・根拠

６．児童の好きな魚

「ぎょしょく教育」授業を受けた児童が好きな魚は、タイ類、マグロ類、カツオ類、ブリ類、サケ（サーモン）が上位５位にランクされている。（表２）このうち、地域に密着した魚類（水揚げ、養殖されている魚類）が上位を占めている。

魚　　種	人数	スコア	魚　　種	人数	スコア
タイ類	230	748	カサゴ（ホゴ）	41	132
マグロ類	214	796	ウナギ	40	141
カツオ類	181	575	キビナゴ	38	103
ブリ類	179	565	貝類	29	79
サケ（サーモン）	124	400	シシャモ	28	77
アジ類	110	323	エビ類	28	76
サバ	71	205	ハギ類	23	61
イカ	69	200	カニ類	19	58
サンマ	64	161	タチウオ	19	46
タコ	50	115			

表２　児童の好きな魚

＊自由記述の内容を分類し整理したものである。
＊スコアは１番に好きなものを５点、５番に好きなものを１点として集計したものである。
＊人数は回答数である。
＊貝類には、サザエ、アワビ、ヒオウギガイ、カキ、貝柱、ホタテ等を含む。

７．児童の好きな魚料理

「ぎょしょく教育」授業を受けた児童が好きな魚料理は、刺身、寿司、塩焼き、煮つけ、たたきが上位５位にランクされている。（表３）なお、調理法で整理した場合には、焼き物、刺身、寿司、煮物、たたきの順になっている。

料　理　名	人数	スコア	料　理　名	人数	スコア
刺身	38	139	ブリの照り焼き	4	15
寿司	31	127	天ぷら	4	12
塩焼き	22	71	唐揚げ	4	9
煮つけ	19	52	ホゴの煮つけ	4	8
たたき	13	37	カツオの刺身	3	13
タイ飯	12	30	照り焼き	3	12
タイの塩焼き	9	37	キビナゴフライ	3	9
カツオのたたき	9	25	味噌汁	3	9
フライ	8	21	アジの塩焼き	3	8
焼き魚	7	13	タチウオの塩焼き	3	7
ブリしゃぶ	6	24	アジの刺身	2	9
マグロの刺身	6	23	サバの塩焼き	2	8
ブリ大根	6	21	アジフライ	2	6
マグロのすし	5	16	あんかけ	2	4
サケの塩焼き	5	15	ウツボ煮	2	3
サンマの塩焼き	5	14			

表３　児童の好きな魚料理

＊自由記述を分類し整理したものである。

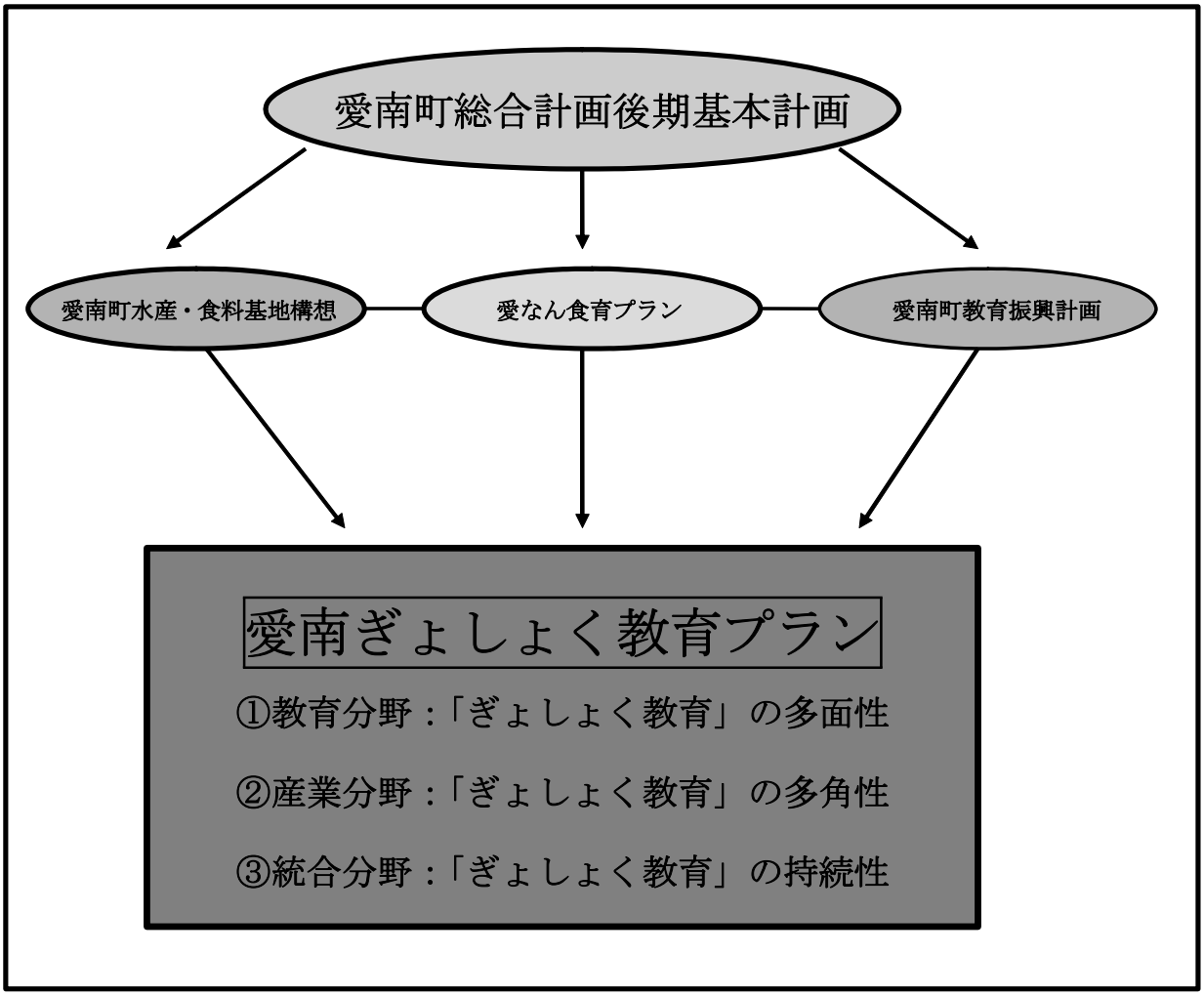
＊スコアは１番に好きなものを５点、５番に好きなものを１点として集計したものである。

＊人数は回答数である。

４．策定の根拠と方向性

１．策定の根拠：「ぎょしょく教育」と既存の地域計画

「ぎょしょく教育」は今後の本町における町づくり・地域振興のキーワードの一つになり得ることから、既存の地域計画との整合性を図ることが本プラン策定の前提となる。ここでは、「ぎょしょく教育」に関して、直接的に言及されている計画に限定する。具体的には、本町の中核的な地域ビジョンを提示した「愛南町総合計画後期計画」（平成22年４月策定）、水産振興の方向性を明示した「愛南町水産・食料基地構想」（平成20年９月策定）、食育推進の方向性を提案した「愛なん食育プラン」（平成22年３月策定）、教育振興の方向性を提示した「愛南町教育振興基本計画」（平成22年４月策定）の４つである。



（1）愛南町総合計画後期基本計画

★将来像：「ともにあゆみ育て創造するまち」

★基本目標：「活力ある産業を育てるまちづくり（産業・観光）」

３つの方針：産業の振興、雇用拡大の推進、愛南ブランドの創出

★基本事業：漁業経営の安定化、持続可能な水産業振興に向けた環境の整備

◎「ぎょしょく教育」と消費拡大

魚食と健康に関する啓発と普及、「地産地消」の推進、水産物の消費拡大

（2）愛南町水産・食料基地構想

★基本構想：愛南の清浄な海を活用した持続的な水産・食料の安全保障を原則に、本町を水産・食料基地としての位置付け

★基本目標③：（人材育成）最先端技術を地域の産業振興へ効果的に展開していくための優秀な人材を確保と育成

◎主要施策：「ぎょしょく教育」の活用

○食育・「ぎょしょく教育」の周知・認定活動事業

＊新たな人材の確保と育成として、食育・「ぎょしょく教育」推進のためにマイスターやサポーターの育成

＊地域の産業や文化に対する理解を深め、地域の食材を使用した多様な経済活動や文化活動を展開し、情報発信を推進して、食育ビジネスの創生

（3）愛なん食育プラン

★スローガン（基本理念）：「みんなで取り組み愛南の食育！　～健やかな心とからだと地域力～」

★３つの基本目標と６つの実践目標、12の重点アクションプラン

★産業分野の基本目標Ⅲ「愛南の自然の恵みに触れ、食べ、感じて、食文化を理解しよう！」

★実践目標⑤「“体験型食育”で、愛南の食と人をつなごう！」

◎「ぎょしょく教育を核とした水産版の総合的食育システムの構築」

○重点アクションプランのなかで最優先課題

○「魚好き」の町民を増やして健康増進を図るとともに、町民の魚介類消費を拡大して、本町の中心的な産業である水産業の活性化を進めること

○「ぎょしょく教育発祥の町・愛南」であることをＰＲして本町の魚介類を地域ブランドとして確立：幼稚園・保育所、小中学校・高校、公民館で「ぎょしょく教育」に関する各種イベントの実施と深化

（4）愛南町教育振興基本計画

★基本目標：「豊かな心と文化を育むまちづくり」（愛南町総合計画の踏襲）

★副題：「郷土を理解し、社会の一員としての生きる基盤を育て、心豊かでたくましい

人づくり」の新設

★副題の意図：温暖な気候と恵まれた自然や豊かな郷土の文化、歴史、産業、温かい人情など、町民にとってかけがえのない財産を生かしつつ、郷土に誇りを持って、郷土や社会の発展のために貢献できる人を育成する

★「ぎょしょく教育」が連携する施策のための基本的方向

◎基本的方向１（社会全体で教育の向上に取り組む）

○「愛南町食育推進協議会」や「愛南町ぎょしょく普及推進協議会」との連携・協力

○産官学民による食育・「ぎょしょく教育」に関する事業の展開

◎基本的方向２（個性を尊重し、社会の一員として生きる基盤を育てる）

○規範意識を養い、豊かな心と健やかな体をつくるための施策として、食育・「ぎょしょく教育」による健康教育の推進

○地場産物を活用した学校給食の推進、「ぎょしょく教育」の推進に向けたプログラムの作成

２．策定の方向性：施策のための基本方針

既存の地域計画における位置付け、取り組むべき内容を踏まえると、「ぎょしょく教育」は地域再生の起点となる地域力の養成に果たす役割は大きい。既存の地域計画との整合性を念頭に置くと、本プランの方向性は教育分野と産業分野、さらに両者の基盤となる統合分野の３つ分野で検討する必要がある。したがって、「ぎょしょく教育」の施策の基本方針は、次の３つである。

（1）教育分野：地域の教育力を止揚する「ぎょしょく教育」の多面的な推進

教育分野における方向性として、「ぎょしょく教育」は、地域活性化の基盤、地域の教育力を止揚する取り組みと位置付けられ、地域の社会関係そのものを豊かにして、水産業と地域社会を紡ぐことができる「地域理解教育」である。

「ぎょしょく教育」授業の評価については前述したように、五感による体験学習が重要であり、それは有効的な動機付けとなり、鋭い洞察力や豊かな想像力、積極的な行動力を培う基盤になっている。また、「ぎょしょく教育」は、地域に根ざすことから、水産業・漁村の多面的機能とも関連する。水産物供給という本来的機能のほか、教育との関連から、「文化を継承し創造する機能」がクローズアップされる。漁村地域に存在する祭礼や景観、魚食などの文化には、様々な創意や工夫、つまり、生活の技術や知恵も見られ、それらに独自性がある。これらの事象を総合的に把握することで、地域の産業と文化を見直す端緒となり、地域文化を伝承していく機会につながる。

したがって、「ぎょしょく教育」は、ただ単に魚の知識に学んで魚を調理し試食するだけではなく、論理と感性を伴う教育方法で地域の社会や文化を総合的、かつ、系統的に理解することから、「地域理解教育」と位置付けられる。地域の魅力となる地域資源の保全

や復活、創成することで、「ぎょしょく教育」は地域の教育力づくりに連動でき、地域水産業を中心に地域活性化のためのリーダーなどの人材育成にも資する。「地域理解教育」としての「ぎょしょく教育」は、子供たちの魚離れ是正にとどまらず、子供とその保護者に地域の良さを改めて問いかけ、地域への愛着や誇り、地域に対するアイデンティティを醸成するきっかけ、水産業と地域社会を紡ぎ直す有効な契機となる。

（2）産業分野：水産振興に向けた「ぎょしょく教育」の多角的な展開

産業分野における方向性として、「ぎょしょく教育」は、地域活性化の基盤、地域の水産振興を推進する取り組みと位置付けられ、水産振興のツールとして、地域の産業経済を止揚させることができる。

本町において、農林水産振興をベースにした地域活性化の取り組みで代表的なものは、愛南ブランドの確立である。これは2007年策定の「愛南ブランドアクションプラン」で明記され、その基本方針が町内外での展開・発信による地域ブランドと、生産加工と販売促進による商品ブランドの連携・相乗効果をもとに確立されるものである。地域資源を活用して、他地域との差異化を図った優位な商品ブランドを開発するとともに、地域そのものをブランド化すること、つまり、地域の魅力づくりを展開するものである。良質な地域水産物を町民に理解してもらってその利活用を促進する一方、消費者のイメージアップや意識改革を進め、市場における競争力、消費地などへの情報発信力を高めることが重要となる。実質的な食育活動をもとに、地域水産物のブランド化に向けた戦略として、「ぎょしょく教育発祥の地・愛南町」を最大のセールスポイントに多様な戦略を推進し、漁商工連携による「ぎょしょくビジネス」も視野に置く必要がある。

「ぎょしょく教育」は、地域水産物のブランド化において、教育分野との連動も含めて、単なるＰＲ戦略の手段のみならず、商品ブランドと地域ブランドの戦略で重要なコンテンツとして大きな役割を果たす可能性が高い。

（3）統合分野：地域に根ざした持続可能な「ぎょしょく教育」システムの構築

既存の地域計画との整合性を前提に、今後の「ぎょしょく教育」施策の基本方針を教育分野と産業分野に区分して整理してきたが、２つの分野をしっかりと支える基盤的な分野も不可欠である。他方、実質的な事業・取り組みには、現実的に２つの分野の不可分な点も多いことから、相互の連動によるスパラル効果も期待できる。いずれにせよ、「ぎょしょく教育」は地域の特性を踏まえた産業教育であることから、持続可能な取り組みとするためのシステムを構築する必要がある。

５．理念と目標

１．基本理念（スローガン）

本町の「ぎょしょく教育」推進に向けて、次のような基本理念を標榜する。

「ぎょしょく教育」で、明日の愛南を拓く！

「ぎょしょく教育」で、地域も、水産業も、元気いっぱい！！

これからの愛南は、「ぎょしょく教育」から！！！

２．基本目標と実践目標

上述の基本理念にもとづき、教育分野・統合分野・産業分野の３分野における基本目標として、次の３つの基本目標を提示する。その上で、それらの基本目標を達成するために、10項目の具体的な実践目標を設定し、また、「ぎょしょく教育」実践にむけた原則を提案する。

基本目標Ⅰ：教育分野

地域理解教育としての「ぎょしょく教育」の推進

実践目標１　「生涯ぎょしょく教育」の実践

実践目標２　「ぎょしょく教育」のコンセプトと実践活動に関する拡充

実践目標３　「ぎょしょく教育」に関する新たな教材・ツール・マニュアルなどの開発

基本目標Ⅱ：統合分野

地域に根ざした持続可能な「ぎょしょく教育」システムの構築

実践目標４　「ぎょしょく教育」に関する体制・内容の強化と人材の育成

実践目標５　「ぎょしょく教育」を念頭に置いた地場産水産物の地産地消推進

実践目標６　「ぎょしょく教育」に関するイベント開催と情報発信

実践目標７　「ぎょしょく教育」を通じた地域間の交流と連携

基本目標Ⅲ：産業分野

水産振興ツールとしての「ぎょしょく教育」の進展

実践目標８　「ぎょしょく教育」をもとにした地域ブランドの確立

実践目標９　「ぎょしょく教育」を基本とする新たな水産加工品の提案と開発

実践目標10　「愛南ぎょしょくツーリズム」の確立

３．実践原則

「ぎょしょく教育」は、地域の総意・総力をもとにした「地域の協働化」を実践の原則とする。産官学民の関係者が横断的で綿密な交流・連携・協働を推進して「ぎょしょく教育」実践に当たる。

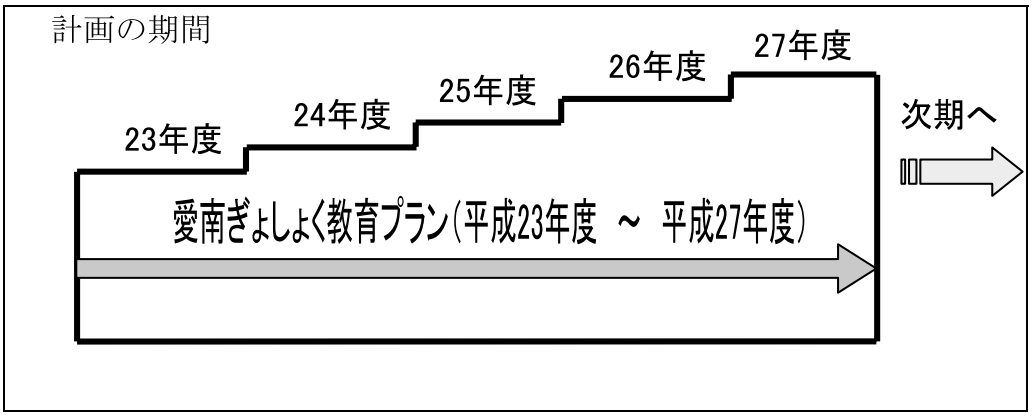
「ぎょしょく教育」の実践原則

「地域の協働化」としての実践：産学官民の関係者が交流・連携・協働し、一体となって展開する。

４．実践期間・評価

本プランは、当初、平成23年度から平成27年度までの５年間とし、その後、５年ごとに見直す。

なお、計画中であっても、具体的な取り組みは、評価（効果測定）を踏まえて、基本目標、実践目標にしたがって臨機応変に対応する。



６．今後の具体的な方策

本プランは、前述の基本理念（スローガン）、基本目標を踏まえて、「ぎょしょく教育」の３分野（教育分野、統合分野、産業分野）における実践目標を提示し、それに向けた具体的な取り組み例を提示する。

本プランで列挙した具体的な取り組みは様々なレベルのものが含まれている。これらはあくまで例示であることから、基本理念・基本目標・実践目標にしたがい、多様性・汎用性の高いものが他にも数多く想定できよう。留意しておきたいことは、本計画の趣旨・目標を踏まえた新たな取り組みの提案と実施は大いに歓迎されることである。

教育分野	統合分野	産業分野
①「生涯ぎょしょく教育」の実践 ②「ぎょしょく教育」のコンセプトと実践活動に関する拡充 ③「ぎょしょく教育」に関する新たな教材・ツール・マニュアルなどの開発	④「ぎょしょく教育」に関する体制・内容の強化と人材の育成 ⑤「ぎょしょく教育」を念頭に置いた水産物の地産地消の推進 ⑥「ぎょしょく教育」に関するベント開催と情報発信 ⑦「ぎょしょく教育」を通じた地域間の交流と連携	⑧「ぎょしょく教育」をもとにした地域ブランドの確立 ⑨「ぎょしょく教育」を基本とする新たな水産加工品の提案と開発 ⑩愛南ぎょしょくツーリズム」の確立

★　これらの実践目標にもとづく具体的な取り組みは、産官学民（愛南漁協・久良漁協、愛南町役場、愛媛大学、愛南町内の地域諸団体や住民）において、横断的、かつ、綿密な交流～連携～協働を推進し、地域の総意と総力をもとに、「ぎょしょく教育」実践を推進していく必要がある。

１．教育分野の基本目標：地域理解教育としての「ぎょしょく教育」の推進

実践目標１　**「生涯ぎょしょく教育」の実践**

あらゆるライフステージ、ライフシーンにおいて「ぎょしょく教育」を推進し、これまで以上に、町民に密着した取り組みとして定着化を図る。世代を超えて、様々な場面と機会を通じて幅広く実践する「生涯ぎょしょく教育」を提唱する。

（具体的な取り組み例）

①乳幼児への「ぎょしょく教育」の実施

本町では、就学前の子供、幼稚園・保育所の子供たちに「ぎょしょく教育」を展開してきたが、乳幼児期においても、「ぎょしょく教育」を試行する。たとえば、母子健康相談などの乳幼児対象の行事などで、魚の効能、出汁の重要性を伝えて実践する。

②幼稚園・保育所でのぎょしょく教育の充実

幼児期の「ぎょしょく教育」は「魚触」を中心に、魚への親近感を持たせる取り組みを実施しているが、小学校への本格的な「ぎょしょく教育」への移行をスムーズに行うために、「愛南ぎょレンジャー」を活用したコンテンツで直接的な動機付けとなるような取り組みを進める。

③「義務ぎょしょく」の拡充

平成22年度より「義務ぎょしょく教育」として、町内すべての小・中学校で「ぎょしょく教育」を実施しているが、魚に関する系統的な学習を基本として、さらに内容や実践方法の質的向上を図る。たとえば、調理技術の基礎である「さばき方」を習得するシステムを構築し、それができた児童には「認定証（認定バッジ）」などを発行する。

④社会教育としての「ぎょしょく教育」の充実

これまでに公民館などで町民の社会教育としても、「ぎょしょく教育」を推進してきたが、より包括的なぎょしょく普及を図るために、学校、家庭以外の第３の場で魚食のきっかけを創出し、ぎょしょく習慣の継承を図る。

⑤高齢者に向けた「ぎょしょく教育」の試行

健常者と介護必要者を念頭においた「ぎょしょく教育」を試行する。介護必要者には、健康の維持・増進のために、介護食や病院食で地場産魚の有用性を考慮したメニューを提供する。健常者は、新たな生きがいの発見、ぎょしょく習慣の継承のために、「ぎょしょく教育」の有力なサポーターと位置付け、関連イベントでの支援を要請していく。

⑥「魚のさばける父親」の育成とイメージ化

「魚をさばく」という作業を通して、「いけてるパパ」をイメージ化するとともに、親子

や夫婦など家族のコミュニケーションを活性化し、家族の絆の再認識を諮る。おやじの会のイベントや、公民館の「男の料理教室」等とタイアップし、父親や祖父を対象とした「ぎょしょく教育」を展開する。調理などの家事労働におけるジェンダーフリーの推進にも資するように配慮する。

⑦新婚夫婦への結婚祝いとして調理器具の贈呈とその活用講習の実施

20～30歳代の魚離れも顕著であり、また、育児の機会の可能性が大きいことから、婚姻届を提出した夫婦に対して、本町から調理器具を贈呈する。また、その夫婦を対象に魚介類の調理講習会を開催する。

⑧生活習慣病の予防・改善メニューの提案

魚の機能性成分であるＤＨＡ，ＩＰＡなどを活かした、生活習慣病の予防・改善メニューを考案して周知することで、魚の良さ、「魚色」や「魚食」の意味を深めてもらう。

実践目標２　「ぎょしょく」のコンセプトと実践活動に関する拡充

魚を系統的、かつ、総合的に理解する「ぎょしょく教育」は、そのコンセプトとして、７つの「ぎょしょく」が提案されている。これら７つのコンセプトに関する意味や内容を拡充させるために、第８のぎょしょく・「魚織」を展開する。そして新たなコンセプトとして、第９のぎょしょく・「魚書句」の内容を確立する。さらに、「ぎょしょく」を10のコンセプトによる構成を目指し、質の高い多面的な「ぎょしょく教育」を確立し、効率的な実践につなげていく。

（具体的な取り組み例）

①「魚植」のコンセプト拡充と実践の本格化

「魚植」について環境と生態の視点から内容を拡充する。「山が海を育てる」という山と海の連鎖系を念頭に置いて、山間部と臨海部を一体とした統合的な「ぎょしょく」を検討する。たとえば、「ぎょしょく教育」を環境教育の一環として位置付け、これまで実践したことのある植林活動を本格化する。

②「魚植」の新たな実践活動の試行

全国各地で従来、推進されている植林活動のほかに、本町の海洋環境に立脚した実践活動を試行する。たとえば、本町の海の生態系で重要な一端を担うサンゴを保護するサンゴ１株出資運動（サンゴ保護活動）、養殖漁場の周辺海域を中心とした里海運動などを立案して試行する。

③第８の「ぎょしょく」・「魚織」の展開

「ぎょしょく教育」授業をはじめ、「ぎょしょく」イベントを支援し推進するための組織をさらに展開する。従来の「愛南町ぎょしょく普及推進協議会」の組織を質的に充実するとともに、「ぎょしょく教育」実践のための支援団体・組織を広く募り、「ぎょしょく教育」事業を実践する。

④第９の「ぎょしょく」・「魚書句」の確立

「魚書句」は、俳句など文学から検討するもので、愛媛県の代表的な文学の表現形態である俳句をもとに「ぎょしょく」の周知と徹底を図る。たとえば、魚の旬のおいしさを

伝えるために、新たな季語を創出したり、魚のおいしさや良さを伝えるために、俳句コンテストなどの俳句に関するイベントを開催したりする。

⑤第10の「ぎょしょく」の創出に向けた検討

「ぎょしょく」の多義性を、町内外に対して象徴的に提示するために、次なる「ぎょしょく」を考案する。これまでと同様に実践活動のなかで考案するだけでなく、広く町内外に公募して、新たな「ぎょしょく」を完成させる。

⑥『お魚図鑑』を活用したコンテンツの拡充

町民と愛媛大学が共同で刊行した『愛南お魚図鑑』を活用して、「魚色」をはじめとする「ぎょしょく」のコンテンツを拡充する。とりわけ、「ぎょしょく教育」授業で効率的な活用法を検討し、その実践を効果的なものにする。

⑦「ぎょショック移動水族館」の導入

「ぎょレンジャー」にちなんで、６種類の魚介類、さらには、旬の魚を活魚水槽に入れて、「ぎょショック移動水族館」とし、「ぎょしょく教育」授業の実施時に活用する。子供たちに泳いでいる地域の魚を紹介し、観察する～触れる～解体・調理するの流れで、「ぎょしょく教育」授業の導入、魚への興味や関心の動機付けとして活用する。

実践目標3　「ぎょしょく教育」に関する新たな教材・ツール・マニュアルなどの開発

「ぎょしょく教育」実践が教育効果をあげるとともに、社会的な評価を得ており、本町内において、その対象年齢や機会の広がりを見せている。今後の「ぎょしょく教育」には的確な教材・ツールなど実践コンテンツの開発は不可欠である。これまでにも、愛媛大学との協働で、いくつかの教材やツールが開発されているが、それらの評価分析をもとに、より適合した教材・ツールを開発する。また、「ぎょしょく教育」の授業コンテンツを標準化・平準化を図るために、詳細なマニュアルを作成する。

（具体的な取り組み例）

①「愛南ぎょレンジャー体操」の開発

これまでの保育所・幼稚園向けの「ぎょしょく教育」ツールは「愛南ぎょしょくの唄」のみであった。「愛南ぎょレンジャー」の認知度が高まっていることから、新たなツールとして「愛南ぎょレンジャー体操」を開発し、より親しみやすい「ぎょしょく」を展開する。

②悪役「愛南ぎょレンジャー」の開発

これまで、「愛南ぎょレンジャー」の主たる目的は、愛南町の水産物をＰＲすることであったが、魚好きの子供を増やすことに注目して、悪役「愛南ぎょレンジャー」を開発する。これは、発想を逆転して、魚嫌いのキャラクターとし、ストーリー性を持たせて、

魚好きを増やすものである。

③「愛南ぎょレンジャーの唄」の再作曲とＣＤ化

愛南ぎょレンジャーの浸透に伴い、既存の「愛南ぎょレンジャーの唄」を公募して再作曲化する。本町の園児・児童・生徒から作詞を、町民から作曲を、それぞれ協力を得てＣＤ化して、教育現場での教材、愛南ぎょレンジャーのＰＲなどに活用する。

④「愛南ぎょレンジャー」のアニメ化

保育所・幼稚園での「ぎょしょく教育」は、現在、パワーポイントを用いたプレゼンテーションであるが、園児らの興味をより引き出すために、園児らに日常的に親しみやすいアニメーションを採用する。「魚嫌いと戦い、魚好きを増やす」というストーリーで構成される「愛南ぎょレンジャー」のアニメーション化を試みる。

⑤新たなカードゲームの開発

愛媛大学との協働で開発されたカードゲーム「ぎょショック」は優れたツールであるが、さらに定着させていく必要がある。このコンセプトを踏まえた新企画として、小学生を対象に「愛南ぎょレンジャー」を含めて、より多くの遊び方ができるカードを開発する。

⑥新たなマニュアルの制作

愛媛大学との協働で作成された「ぎょしょく教育マニュアル」は、その普及に貢献したが、「ぎょしょく教育」のコンセプトとコンテンツが改訂され、また、対象となる年代が多様化したために、抜本的な改編によるマニュアルが不可欠である。「生涯ぎょしょく教育」の方針にしたがい、実施の内容や方法などＴＰＯに応じた包括的なマニュアルが求められる。

２．統合分野の基本目標：地域に根ざした持続可能な「ぎょしょく教育」システムの構築

実践目標４　**「ぎょしょく教育」に関する体制・内容の強化と人材の育成**

本町における食育活動と水産振興の基点として最重要項目のひとつに位置付けられる「ぎょしょく教育」は、常に質的向上を進めながら、持続可能性を持った取り組みにする必要がある。そのために、「ぎょしょく教育」の推進体制を強化するとともに、推進の担い手となる人材の育成を行う。

（具体的な取り組み例）

①「ぎょしょく教育」推進母体となるＮＰＯの設立

本町での「ぎょしょく教育」の定着と多角化に伴い、行政、町内の幼稚園・保育所、小中高校、愛南町ぎょしょく普及推進協議会をはじめとする地域諸団体、さらに、愛媛大学など関連団体との調整を行いながら、地域に根ざして効率良く推進するために、ＮＰＯ「愛南ぎょしょくリンク（仮称）」を設立する。これには、産学官民が連携して地域総意で参画し、雇用機会の創出も図る。

②愛南町ぎょしょく普及推進協議会の拡充

本協議会は、これまで「ぎょしょく教育」の実質的な推進母体の役割を担ってきたが、ＮＰＯ設立までは効率的な運営のために拡充するとともに、円滑なＮＰＯ移行を行う。ＮＰＯ設立後は、そのサポート的な役割を担えるように組織を整備する。

③「ぎょしょく普及指導員」の認定と人材バンクの設立

「ぎょしょく教育」の地域的な効果を高め、より幅広く円滑に推進するために、「ぎょしょく教育」の指導協力者を「ぎょしょく普及指導員」として認定し、人材バンクに登録する。また、同時に、「愛なん食育プラン」で計画されている人材バンクにも重複登録し、農業を含めた地域産業に関わる食育インストラクターとする。

④「ぎょしょ教育」実践を踏まえた食のビジネス化

人材バンク登録者が「ぎょしょく教育」の実務に行った場合、それに対して有償ボランティア化するなど経済的なインテンシブを設けて、食のビジネス化に向けた萌芽的な試みを進め、所得機会の創出をねらう。

⑤「愛南ぎょしょくマイスター」制度の確立

「ぎょしょく教育」の地域的な定着と面的広がりを考慮し、「ぎょしょく教育」の内容に関する知識・スキルのアップを図るために、専門的なプログラムを構築する。その修了者には「愛南ぎょしょくマイスター」として認定する。本町の水産物や水産業に関する新たな「ぎょしょく教育」の知識体系を提示し、それへの理解を検定方式で測定する。

⑥「愛南ぎょしょくキッズマイスター」制度の確立

⑤の試行として、小学校高学年を対象にした「愛南ぎょしょくキッズマイスター」制度を確立し、その認定を行う。小学校５年生の社会科の授業内容を基本に、国語科や理科なども含めて教材開発を行う。

⑦ｅ-ラーニングシステムを導入した「ぎょしょく教育」システムの構築

⑥に関連して、入門的な内容とする教材を開発し、ｅ-ラーニングシステムを導入する。町内外の幅広い層が受講しやすく、多様な「ぎょしょく教育」愛好者を発掘し、本町のファンやサポーターを確保する。また、本町との交流による児童・生徒の事前学習用教材としても活用する。

⑧「ぎょしょく教育推進条例」の制定

「ぎょしょく教育発祥の地・愛南町」として、「ぎょしょく教育」を核にしたまちづくりを推進していることを内外へ象徴的に明示するとともに、本町で必要な措置を講じるために、「ぎょしょく教育推進条例」を制定する。この制定により、町民への再認識、地域のイメージアップにつなげる。

実践目標５　「ぎょしょく教育」を念頭に置いた水産物の地産地消推進

本町の水産業は１年を通じて多種多様の魚介類が水揚げされ、さらに、魚介類の養殖生産も盛んである。これらの優れた水産物は町外に出荷されているが、水産物の地産地消も、様々な観点から重要である。そこで、学校をはじめ公共施設、病院、介護施設などにおいて、地場産水産物の積極的な利用を推進する。

（具体的な取り組み例）

①「愛南町地場産水産物利用促進連絡協議会（仮称）」の設立

地場産水産物納入システムの基盤整備として、「愛南町地場産水産物利用促進連絡協議会（仮称）」を設立する。本町給食センターの集中化・一本化に向けた検討が行われていることもあり、地場産水産物が学校給食に幅広く円滑に継続的に利用されるように、現在の意見交換会を発展させる。給食現場のニーズに合った加工品や供給体制を確立するために、幅広い意見交換を行う。また、学校給食以外の公共施設などでも、順次、利用促進を検討する。

②「ぎょしょくの日」の制定

保育所で展開されている「魚魚（とと）の日」の統一お魚メニューの実施を小・中学校にも拡大し、地場産水産物を用いた統一の特別メニューを提供する。この日を「ぎょしょくの日」とすることで「ぎょしょく教育」への理解が深まり、また、特別メニューの提供で地場産水産物への理解を喚起することで地産地消に向けた契機となる。

実践目標６　「ぎょしょく教育」に関するイベント開催と情報発信

これまでの実績を踏まえて「ぎょしょく教育」に対する親和性を高めるために、趣向を凝らしたイベントを開催する。そして、各種のツールを活用した情報発信により、今後の「ぎょしょく教育」の更なる周知徹底と普及浸透を推進する。

（具体的な取り組み例）

①「愛南ぎょショック・コンテスト」の開催

魚料理メニューのバリエーションの限界、手間と時間がかかるイメージを払拭できるメ

ニューを広く募集し、「愛南ぎょショック・コンテスト」として開催する。新たな魚料理メニュー開発の機会とし、子供に食べさせたいお手軽魚料理コンテストとする。

②「愛南ぎょしょく子供ポスター・コンテスト」の開催

「ぎょしょく教育」のコンセプトに関する理解を促進させるために、それらのコンセプトを題材に取り込んだポスターのコンテストを実施する。入賞者には賞状と地場水産物を贈呈し、入賞作品は「ぎょしょく教育」活動のＰＲや啓発に活用する。

③多様なメディアを活用した「ぎょしょく教育」の情報発信

「ぎょしょく教育」の幅広い周知、地産地消の促進を目的に、本町の広報誌やＨＰなどへ恒常的に情報を提供し、町内外に広く情報を発信する。たとえば、「ぎょしょく教育」に関する様々な実践活動、魚料理レシピ、地場産水産物を利用したお手軽メニュー「愛南ぎょレンジャー」による４コマ漫画などを適宜、小学生に理解できる表現で丁寧に掲載する。また、「愛南町次世代水産業普及ネットワークシステム」と連動した双方向の情報交換を推進する。

実践目標７　「ぎょしょく教育」を通じた地域間の交流と連携

平成22年度より本町は、「ぎょしょく普及事業」に始めた東京都水産課との連携、さらに、愛媛大学の紹介による横浜国立大学教育学部付属鎌倉校との交流に、それぞれ着手した。また、県内でも、東温市や西条市、松山市の小学校や幼稚園において「ぎょしょく教育」による交流がある。今後、幼稚園・保育所、小中学校の児童生徒相互の交流、また、様々なレベルの産消交流（産地である本町と、消費地である大都市圏や県内地域との交流）は今後、その教育的な意義、経済的な効果は増大してくる。

（具体的な取り組み例）

①大都市をはじめとする県外地域との産消交流

これまでの東京都や神奈川県との連携をさらに強化し、町内で醸成されてきた「ぎょしょく教育」のスキル、生産の現場の声を地場産水産物の付加価値として展開する。大消費地での「ぎょしょく教育」を進めることで、愛南町ファンの創出を進め、学校給食等での地場産水産物の販売促進と、グリーン・ツーリズムなど都市との交流事業へとつなげる。また、地域的に、関西圏や中京圏、九州圏との産消交流も暫時、始める。

③県都の松山市をはじめ県内地域との産消交流

県都の松山市をはじめ、西条市や東温市など県内の消費地における自治体や幼稚園・保育所、小中学校、公民館など可能な関係団体と連携する。「ぎょしょく教育」を実践するとともに、各種のイベントで「ぎょしょく教育」のＰＲ・交流活動を展開する。

３．産業分野の基本目標：水産振興ツールとしての「ぎょしょく教育」の進展

実践目標８　**「ぎょしょく教育」をもとにした地域ブランド確立**

「ぎょしょく教育発祥の地・愛南町」を地域のアピールポイントとし、本町の地域イメージアップに連動させる。「ぎょしょく教育」の取り組みは、地域のシンボルとして、地域ブランド形成の一翼を担い、産業振興のツールに位置付ける。商標（「ぎょレンジャー」「ぎょレンジャーキャラクター」「ぎょショック」）をもとに、グッズやＣＭ、アイコンを作成し、本町の町民、町外の消費者や観光客に対して、販売戦略やＰＲに利活用する。

（具体的な取り組み例）

①「愛南ぎょレンジャー」グッズの製作・販売

ぎょしょく普及戦隊「愛南ぎょレンジャー」は、本町を代表する水産物をモチーフにしており、商標登録を終えたことから、ＰＲキャラクターとして積極的に活用する。平成22年度のカンバッジやポロシャツに続くグッズを開発して販売し、町内外へ発信する。

②「愛南ぎょレンジャー」のＣＭ制作とＰＲ放映

「愛南ぎょレンジャー」のＣＭを制作して、ふるさとＣＭ大賞などのコンテストに出品するほか、放送メディアのスポットで活用し、町内外の各種イベントでＰＲする。

③「愛南ぎょレンジャー」・「ぎょショック愛南」などの「ぎょしょく」アイコン活用

「愛南ぎょレンジャー」や「ぎょショック愛南」など「ぎょしょく」関連のアイコンを設定して、地場産水産物の地域ブランド化やＰＲに活用する。

実践目標９　**「ぎょしょく教育」を基本とする新たな水産加工品の提案と開発**

「ぎょしょく教育」のコンセプトや実践をベースにして、新たなアイディアで水産加工品を提案し開発する。その際に、「ぎょしょく教育」との関連性を明示し、販売促進をサポートする。

（具体的な取り組み例）

①骨まで食べられる水産加工品の開発

「ぎょしょく教育」では、「魚食」の内容で骨のよけ方も含まれているが、逆転の発想で、それができない人にも「魚食」を楽める水産加工品を開発する。骨まで食べられる加工品を独自に開発して、これを活用した介護食や病院食、非常食を商品化する。本町オリジナルの水産加工品を開発し、「ぎょしょく教育」とセットでＰＲ・販売する。

②魚醤の開発

「ぎょしょく教育」の「魚色」や「魚飾」を前提に、キビナゴやタイを活用した魚醤、ドレッシングを開発して販売する。

③水産物を利用したお菓子等の開発

愛南町で水揚げされる水産物を利用した今までにない新しい発想のお菓子等の開発をする。

実践目標10　「愛南ぎょしょくツーリズム」の確立

「ぎょしょく教育」のコンセプトとコンテンツを産消交流型のツーリズムと連動させてパッケージ化し、「ぎょしょくツーリズム」として推進する。特に、東京や神奈川県などの関東圏や県都の松山市との交流実績をもとに多面的な取り組みを進め、愛南型のツーリズムを確立する。

（具体的な取り組み例）

①既存のツーリズムとの連携・差異化

本町にある既存のグリーンツーリズムとの連携を模索する一方、それとの差異化を図るために、水産分野オリジナルの体験型「愛南ぎょしょくツーリズム」を開発する。その際、これまでの町内の子供、保護者に実施してきた「ぎょしょく教育」プログラムを来訪者向けにバージョンアップさせる。

②「ぎょショック・バスツアー」の催行

これまでの実績がある、県内の親子を対象にした体験型バスツアー「ぎょショック・バスツアー」を拡充する。体験メニューとしては、漁場見学や調理実習、試食、町内の子供たちとの産消交流など、親子で楽しめる宿泊滞在型ツアーとする。

③集団宿泊研修や修学旅行の誘致

「ぎょショック・バスツアー」の催行を踏まえた上で、旅行業者とタイアップして、水産業の学習を行う小学５年生の集団宿泊研修や修学旅行を誘致する。産消交流型ツアーとして、まとまった人数の宿泊を見込めるパッケージツアーを誘致する。

④ツアー受け入れ体制の拡充

本町では、農家漁家民宿を中心としたグリーンツーリズムに着手しており、それをバージョンアップさせて、リピーター確保を図る。そのために、団宿泊研修や修学旅行生、ツアー客を受け入れるための知識やスキルを習得するためのセミナーや再組織化を展開する。

愛南町ぎょしょく普及推進協議会

「愛南ぎょしょく教育プラン」策定プロジェクトチーム

代表　若林　良和（愛媛大学南予水産研究センター副センター長・教授）

竹田　英則（愛南町ぎょしょく普及推進協議会会長、久良漁業協同組合代表理事組合長）

向田　信義（愛南町ぎょしょく普及推進協議会副会長、愛南漁業協同組合代表理事組合長）

尾崎イトミ（愛南町食生活改善推進協議会会長）

田村　茂雄（愛南町教育委員会教育長）

中村　維伯（愛南町役場水産課課長）

長田　岩喜（愛南町役場水産課水産研究開発室室長）

兵頭　重徳（愛南町役場水産課産業振興室係長）

角田　善彦（愛媛大学農学部学生）

愛南ぎょしょく教育プラン

≪愛南ぎょしょくタウン構想≫

２０１１（平成２３）年３月２０日　発行

発行　：　愛南町・愛南町ぎょしょく普及推進協議会

企画・編集　：　愛媛大学南予水産研究センター社会科学研究部門
愛南町ぎょしょく普及推進協議会事務局
（愛南町役場水産課産業振興室）
Tel 0895-72-1211　Fax 0895-72-1214

支援　：　平成22年度愛媛県新ふるさとづくり総合支援事業

無断転用厳禁：本プランの内容を使用される場合には、予め承諾が必要です。上記の事務局までご連絡ください。